
さよなら、マルオ君。

A Q

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよなら、マルオ君。

【Zコード】

Z0059Z

【作者名】

AQ

【あらすじ】

低レベルな男子高へ入学した西野祐。いじめられっこのクラスメイト・マルオを不良たちからさりげなく庇う中、ラノベという共通の趣味があることを知る。しかし突然マルオは豹変し人の心の裏表を描いた、サスペンスホラー。あなたのうちに、マルオ君がやってくるゾ……。

【2011・4】アルファポリス『ホラー小説大賞』最終選考作。

高校に入学して一ヶ月。風薫る五月の、爽やかな朝。
西野祐は、自分の席に大人しく座り、ひたすら愛想笑いを浮かべていた。

「……そんで、俺は言つてやつたわけ。『次は無え、今度会つたらぶつ殺す』つてな！」

いかつい顔を歪め、右手の中指をビシッと立てて須藤が笑つた。野太い声にあわせて、その場にいた全員が笑い出す。

祐からしてみれば、何が面白いのかさっぱり分からぬ……むしろ背筋が凍るような話だ。なんせ須藤は昨夜、通りすがりのチンピラに絡まれ、拳一つで撃退したというのだから。

（何だか僕、ヤンキー漫画の脇役キャラみたいだなあ……）

乾いた笑い声を立てながら、祐は心の中で深い溜息を吐いた。高校受験の直前に風邪を引いたあたりから、祐の人生は坂道を転がり落ちて行つた。本命の公立に落ちた祐は、仕方なく滑り止めの私立男子高へ入学。通つていた塾では『バカ高』呼ばわりされたいた学校だった。

ここには、天然記念物レベルの『不良』がうようよしている。

しかも何の因果か、祐は学年で一番悪目立ちする須藤の、隣の席になってしまった。

祐が真面目で成績優秀と知るや、須藤は満面の笑みを浮かべて近寄り、祐を『ブレーン』としてこき使うようになった。といつても今のところは、宿題を肩代わりするという程度だが。（僕はまだ、人間扱いされるだけマシだけど）

須藤の作ったグループは五人組。祐の他には、『腰^{たか}ぎんちやく』のポジションに山岸^{たかしな}と高階。最後の一人は、いわゆる『パシリ』として重宝されている

「おい、マルオ。俺のど乾いた」

さつそく今日も始まつた。ボタンを外した学ランをバサバサとする須藤。裏地に仕込まれた龍の刺繡が揺れ、山岸と高階がにやにや笑う。

神様は残酷だ。須藤の後ろの席になつてしまつたのが、クラスで一番根暗なマルオ 丸尾良広まるおよしひろだつた。その時点で、マルオの運命は決まつたも同然。

「……あ、あの、今日は

「何だよ」

「お、お小遣いが、あまり無くて」

「ああっ？」

いきり立つた山岸が、マルオの机を蹴り飛ばした。マルオは「ヒツ」と小さく叫び、慌てて立ち上がる。小柄ですんぐりしたマルオの額から、玉のよつた汗が吹き出す。

「おいおい、ヤマちゃん。そう脅かすなつて。……なあマルオ。別に俺は、お前にたかうつてわけじゃないんだ。バイト代が出るまで、少しの間貸してくれつて言つてるだけなんだよ」

釣り上がつた一重の目を細め、須藤が諭すようにゆっくりと告げる。山岸は仁王立ちの姿勢で、マルオを憎々しげに睨みつける。腕組みした高階は「そうそう」と涼しげな顔で相槌を打つ。

観念したのか、マルオは蝉の幼虫みたいに背中を丸め、のそのそと教室を出て行つた。

一分ほど遅れて、祐も立ち上がる。

「僕トイレ行つてくる」

武勇伝の続きに熱中する三人は、祐の台詞など右から左だ。祐は騒がしい朝の教室を抜け出すると、学食へ向かった。

ドアを開くと、マルオが床に這いつぶばつていた。自販機の下に腕を伸ばしている。誰かが落とした小銭を拾おうとしているのだろう。よほど必死なのか、祐に気付く様子はない。

祐は人気がないことを確認しつつ、マルオの傍に近寄つた。

「おい、マルオ」

「あれえ、西野君……」

肘や膝に埃をくつつけたマルオが、ゆっくりと立ち上がる。祐はその手に素早く千円札を握らせた。

「え、あの、これ……」

「金足りないんだろ？ とりあえずこれ使いなよ。毎回はアテにすんなよ。あと、須藤たちには内緒な」言い逃げしようした祐の手が、生温かい感触に包まれる。マルオが、握手を求めてきたのだ。

「あ、ありがとう……これ、絶対、返すから」

頭のてっぺんから出てくるような、甲高い不自然な声。分厚い唇をほとんど開かずに喋るから、何を言っているのかつまく聞き取れない。

マルオがこの声を発するたびに、教室の中には忍び笑いが渦巻いた。先生も皆のリアクションを苦笑いで黙認し、何事も無かつたかのように授業を進める。その行為はあからさまで、祐は内心辟易していた。

マルオは、いじめられているのだ。須藤のパシリというだけじゃなく、クラス全員から。

（でも、こいつがいじめられるのは、納得できるんだよな……）

湧きあがる嫌悪感に耐えかね、祐はマルオの手を振り払った。学ランの背中で、握られた手の湿り気をゴシゴシと拭う。

行動だけでなく、頭の中身も鈍いマルオは、祐の“拒绝”にも無頓着だ。長く分厚い前髪の奥で、小さな目が糸のように細められる。ニキビの浮いた丸い頬は紅潮し、薄い唇の端が持ち上げられる。見た目の不気味さ以上に気になるのが、つんと鼻をつく体臭。良く見れば、学ランの肩にはフケが落ち、後ろ髪は脂っこい毛束を作っている。血色の悪い唇から時折のぞく前歯は黄ばみ、ねちゃつと唾液の糸を引いていた。

初めて見たときから、祐はマルオを「気持ち悪いヤツ」と思つて

いた。マルオの家庭の事情を知らなければ、たぶんクラスメイトと大差ない態度を取つていただろう。

入学式の後、祐は担任から呼び出された。入試成績の良かつた祐をクラス委員に任命するついでに、「実は一人、気を使ってやつて欲しい生徒がいるんだ」と伝えてきた。

どうやらマルオの家は、一昔前のドラマばりに悲惨な状況らしい。父親は、数年前に障害を負つた。その後、母親はマルオを残して蒸発。現在は親子二人暮らしで、マルオが父親の世話をしているのだという。

その話を聞いたとき、祐は妙に納得した。

辛過ぎる現実を受け止めるには、頭のネジが緩いくらいがちょうどいい……。

自販機から、もたもたと三本の缶コーヒーを取りだすマルオに、祐は背を向けた。

梅雨入りが宣言された、霧雨の降る日。不良の割には皆勤賞の須藤が、初めて学校を休んだ。

普段は飼い犬を演じている山岸と高階が、王様氣どりになる。マルオはもちろん、祐にまできつい叱責が飛んだ。

祐はクラスの雑務があると嘘をつき、特別棟のパソコンルームへ避難した。優等生の祐は、教師に「調べたいことがある」と一声かければ、合い鍵を預かることができた。内側から慎重に鍵をかけ、ホツと一息つく。

窓の向こうには、どんよりと重たげな灰色の雲。

(今頃マルオ、あいつらの集中砲火浴びてるだろうなあ……)

湧き上がる罪悪感を搔き消すべく、祐は腹の中に隠し持っていた文庫本を取り出した。それはネットで評判が良かつた、新作のライノベルだ。平凡な主人公が、特殊な能力を手に入れて魔物と戦う

という、定番のストーリー。現実逃避にはちょうど良かつた。

そんな休み時間を繰り返し、放課後。

祐がパソコンルームの鍵を返して再び教室へ戻ると、もうクラスメイトは誰もいなかつた。

帰り支度を終えた祐は、思いついた。このまま読了して、帰りがけに駅前の古本屋へ売りに行けば、別の本が買える……。

電気の消えた薄暗い教室で、読みかけの文庫本を開く。物語のフィナーレは、涙が浮かぶほど感動的だった。祐がすんと鼻をすますたとき。

パチン。

教室が、突然人工的な白い明かりに包まれた。反射的に目を瞑る祐の耳に、のんびりとした声が届く。

「西野君、まだいたんだあ」

半笑いを浮かべて近寄つてくるマルオを、祐は険を含む目つきで睨んだ。読書の邪魔をされた恨みを込めて。

「ぼくは、忘れ物、しちゃってさ……えへへ」

言い訳めいたことを言つと、マルオは自分の席に座り、中から黒い手帳を取り出した。マルオが出て行くまで待つといふと、祐は文庫本を一度閉じる。

と、マルオが叫んだ。

「ああっ、こ、西野君！」

「へつ？」

「その本、ぼくも昨日、読んだよ！」

通学鞄を小脇に抱え、片手に手帳を持つたポーズのまま、マルオは祐の机に突進してきた。思わずのけ反る祐に、マルオはマシンガントークを繰り出す。

どうやらマルオは、この作家の熱烈なファンだつたらしい。一方的にまくし立てるマルオが、祐の机に唾を飛ばす。祐の心には、いつも通りの嫌悪感と、プラスアルファの驚きが浮かんだ。（なんだよ、コイツ普通に頭いいんじゃない……）

成績だけを見れば、マルオのレベルは下の下。それでも、祐の何倍もの小説を読み、それらの作品について深い批評ができる。マルオのイメージが、一気に塗り替えられていく。

マルオにとっては、祐が何を思おうがあまり関係ないようだ。息継ぎの少ない独特の喋り方で、饒舌に語り続ける。溜め込んだ感情を、一気に吐き出すように。

と、祐の携帯が震えた。

その音を耳にし、マルオは小さな田をくつと見開いた。ずっと話しつけていた相手が、人形じゃなく意志を持つ人間だと気付いた……そんな顔だつた。祐は思わず苦笑を漏らし、マルオは指先でボリボリと頭をかいた。

「そ、そうだ。ぼく、早く帰らなきや」

あたふたするマルオの脇から、重たい通学鞄が落ちた。それを拾おうと屈みこむと、今度は手のひらから手帳が滑り落ちる。コミカルな動きに、祐の笑みは深まった。

きっとマルオは、一度に一つのことしかできないのだろう。単に不器用なヤツなのかもしれない。

去り際にマルオは、「今度ぼくの本、貸してあげるね」と囁き、微かに唇の端を持ち上げた。

「ふあ～あ……」

祐は寝不足の目を擦り、大あくびをしながら教室へ入った。昨夜は古本屋に寄り、マルオが勧めてくれた本を買った結果、まんまと徹夜させられてしまった。

教室に一步足を踏み入れた途端、マルオが祐の元へ駆け寄つてきただ。

「お、おはよう、西野君！」

ギョッとして、祐は周囲を見渡した。

教室にはもう大部分の生徒が集まっている。昨日は学校を休んだ須藤も来ていた。山岸と高階は、一日天下を惜しむような素振りも見せず、須藤の脇に大人しく控えている。

彼らの白けた目が、見ている。いつになくはしゃぐマルオと、そのターゲットにされた祐を。

祐の身体は、自動的に動いた。

正面に立ちはだかったマルオから視線を外し、その脇を無言ですり抜けた。バスケでティフェンスをかわすように。

「あ……」

立ち止ったマルオは、祐を追つてくることは無かつた。着席した祐は、さりげなくマルオを見やる。

視界の端に映ったマルオの手には、一冊の文庫本が握られていた。ツキンと刺さる胸の痛みを、祐は無視した。

祐がマルオを『受け入れない』と決めた、翌日。

学校に着いても、昨日のようなアクシデントは起こらなかつた。マルオは自分の席でぼんやりしていて、祐に目もくれなかつた。着席した祐は、安堵の溜息をつく。鞄から教科書を取り出し、机の中に入れようとして……突っ掛かつた。

怪訝に思い中を覗くと、そこには一冊の文庫本があつた。

振り向けば、マルオは口をだらしなく開けて、何も書かれていな深い深緑色の黒板をぼんやりと眺めている。祐は膝の上でその本を開いた。

『この前言つてた、一番面白い本だよ。読み終わったら感想教えてね』

付箋メモに書かれた、汚い文字。

祐は唇を噛みしめ、その本をそつと腹の中にしまつた。

それから祐は、休み時間と放課後を使い、借りた本をその日のうちに読了した。マルオが熱弁を振るつた通りエンタメ性が高く、それ以上に深かつた。主人公が魔法を駆使し、ファンタジックな世界

を旅するだけではなく、命の重さや生きる意味を考えさせられるストーリーだった。

表紙に描かれた、巨大なドラゴンの背に乗る主人公が、祐に問い合わせる。

『このままマルオを無視し続けて、いいのか？』

祐は頑垂れた。「嫌われ者のマルオと友達になつて、同レベルに見られたくない」というプライドがある限り、自分が態度を変えることはない。

ただ、こうしてマルオの世界を知ると、ひどく胸が痛む。

「とりあえず、これは返さなきや」

マルオの貼つた付箋メモを剥がし、代わりに自分のメモを貼る。悩んだあげく、『面白かった、ありがとう』とだけ記して、マルオの机に戻し……その本が、途中で突っかかった。

中を見ていた祐は、見覚えのある一冊の手帳を見つけた。

（これ、昨日マルオがわざわざ取りに来たやつだよなあ……）
何の気なしに手帳を取り出すと、指先にぬめっとした感触。マルオの手垢だ。反射的にそれを投げ捨ててしまう。

「つと、悪い、マルオ」

拾おうと屈みこんだ祐は、その姿勢で硬直した。

薄汚い教室の床に落ち、ばさりと開かれたマルオの手帳……そこに綴られた文字を、祐は読んでしまった。

『　5月9日朝。Sにコーヒーを買わされた。Yが机を蹴飛ばし、Tが嘲笑つた。Z君がお金を貸してくれた。嬉しい。5月9日曆

』

ドクリ、と心臓が嫌な音を立てる。見てはいけないと想いながらも、目を逸らすことができない。

震える指で、祐は手帳のページを繰つた。

毎日当たり前のように繰り返される、マルオへの蔑みと嫌がらせの数々が、事細かに記されていた。
(なんだよマルオ、普通に漢字書けるんじょん……)

祐はあらためて理解した。マルオは、必要以上に愚鈍な人間を装つてゐるのだと。

だつたらマルオが、こんなものを残す理由は……。

証拠にするつもりだ。

ぞくり、と悪寒が走つた。よくある新聞の社会面が浮かぶ。

『いじめ自殺の遺族が、加害者を訴える』

黒く歪な文字が蠢く手帳から、祐はNの文字を拾い集めていく。マルオをいじめていた奴らが、罰を受けるのは自業自得だ。でも祐は、マルオをフォローしてきた。心中で嫌悪していたけれど、なるべく態度には出さないようにした。

マルオだつて祐には感謝しているはずだ。その証拠に、昨日の朝マルオを無視してしまったのに、何のわだかまりもなく祐に本を貸してくれたのだから……。

手帳を繰る指先が、最後のページで止まつた。

「なんだよ、これ……」

身体から、一気に血の気が引いていく。全身の毛穴が総毛立つ。

『 6月13日夕方。N君が一人で教室にいた。ぼくの好きな本を読んで泣いていた。思い切つて話しかけると、初めて笑顔を向けてくれた。これは運命だ。6月14日朝。N君がぼくを見て、わざとらしく目を逸らした。ぼくを好きになつたことを、皆に知られたくないみたいだ。ぼくも恥ずかしいし、しばらくプラントニックな交際をしようと思つ』

気持ちが、悪い。

堪えきれず、祐は乱暴に手帳を閉じた。文庫本と手帳をマルオの机に突つ込み、教室を飛び出す。

微かに芽生え始めた、マルオへの同情や友情も、一瞬で消し飛んだ。

もう一度と、マルオと関わらない。祐はそつ決めた。

梅雨の長雨は、なかなか止まなかつた。

皮膚にまとわりつく湿気のよひに、マルオは祐にねつとりとした視線を送ってきた。

今まで隣の席の須藤と、声の大きい山岸と高階に氣を取られていて、斜め後ろで氣配を殺すマルオは空氣みたいに思つていた。でも一度氣付いてしまえば、あとはもう背中の感覚で分かる。

マルオは、常に祐を見ている。

あの真つ黒いカーテンみたいな前髪の隙間から、授業中も、休み時間も。

そして何度も突っ返しても、毎朝祐の机には一冊の文庫本が入れられた。『読む暇がないから、貸さないでくれ』とメモをつけたにも関わらず。

それどころか、マルオは徐々に“妄想”を肥大させていった。

『今度の本は、正統派の冒険物だから、西野君も氣に入ると思つよ』『この本の主人公は、ちょっと西野君に似てるかな。クールで格好良くて、僕の憧れなんだ』

『西野君に貸す本が無くなつてきたから、本屋で大人買いしちやつたよ』

毎朝、本屋で平積みになつてゐるラノベのシリーズが、一冊ずつ祐に“貢がれる”……。

祐の心が限界を越えそつになつた頃、事件は起きた。

須藤が欠席し、山岸が一度目の王様になつた翌日だつた。

『ごめんね西野君。昨日山岸君に、お小遣いを全部取られちゃつたんだ。だから今日は、旧作で我慢してね。古い本だけれど、ぼく的には名作だよ』

その日、山岸は学校に来なかつた。

街を流れる伊瀬川の河口付近に、青黒い姿で浮かんでいた。

「これは事件じゃなく事故です。皆も、あまり騒がないように」と担任の薄っぺらい説明に、クラスの皆は無言で目配せし合つた。

『事故つつても、あの橋から落ちたんだろ？ 普通あんなところから落ちるかよ』『よじ登つて、自殺したとか？』『アイツが自殺なんてするわけねえだろ』『いや、須藤に脅されてたとかさあ』『むしろ、須藤に殺されたんじゃね？』『それありえるわ

光に向かい飛び交う羽虫のように、クラスメイトたちは根拠のない噂をばら撒いた。

そんな会話を耳にしても、須藤は飄々とした態度を崩さない。高階だけが、目を怒りの赤に染めていた。

その日も、机の中には一冊の文庫本が入っていた。

『山岸君が死んじやつた理由を教えてあげる。この本に出てるんだ。これなら読んでくれるかな？』

祐はその本を見て、戦慄した。

ライトイノベルというには、あまりにも禍々しい表紙の本だつた。ジャンルはホラーにあたるのだろう。黒い背景色に浮かび上がる幾つも不気味なマネキン。それらの眼が、血の涙を流している。

持ち帰る気にはならなかつた。しかし、メッセージも気になつて仕方が無い。迷つた挙句、祐は休み時間パソコンルームに閉じこもり、パラパラと捲つた。

吐き気が出るような、おぞましい内容だつた。

黒魔術を操る主人公が、人を呪い次々と殺害していく。そのやり口は原始的で、恨みを持つ人物の身体を小さな人形フィギュアと同一化させるのだ。操り人形となつたターゲットは、自ら腕を折り、目を抉り、身体をナイフで突き刺し……主人公は、その様子を高笑いしながら見物する。『神』となつた主人公に罰は下されず、読後感は最悪だった。

グロテスクな描写ばかりが連なる、ほとんど中身の無い物語。ただ、最後のページに貼りつけられた汚い文字『『山岸が死んだ理由』の一言が、この本に特別な意味を与えていた。

「まさか、な……」

これはフイクションだ。いくらなんでも、この現代社会に『呪い』なんて、ありえない。

あのタイミングで山岸が死んだのは、単なる偶然に過ぎない……。祐は何度も心に言い聞かせ、その本を閉じた。

文庫本を小脇に挟み、パソコンルームを出てドアに鍵をかける。

「おい」

突然かけられた声に、祐は震えあがつた。飛び退いた拍子に、肩がパソコンルームのドアに当たり、ガタンと大きな音を立てる。

「西野ビビリ過ぎ」

「……あ、高階君」

細く整えた眉を吊り上げ、祐に不審げな眼差しを向ける高階。俯いた祐は、すぐに胸倉を掴まれ上を向かされた。

「お前、山岸のこと何か知ってるんじゃねえだろーな」「な、何のこと?」

「気付いたんだよ。お前の態度、最近妙だつたってな……今だつて、
こそそ隠れて氣味悪い本読みやがって」

ハツとして見下ろすと、文庫本が床に転がっていた。

(……まずい、あのメモを見られたら)

高階が、祐を荷物のように放り出す。ドアに背中を打ちつけた祐は、ゲホゲホと咳こんだ。高階はその本を睨みつけると、拾い上げる代わりに上履きで容赦なく踏みつけた。

「ヤマの遺留品には、その日買った新作のゲームがあつた……そんな奴が、自殺なんてするわけない。事故にしても、アイツは間違つてもあんな所から落ちるようなヘマはしない。絶対、殺されたんだよ……！」

握り拳を震わせ、怒りを露わにする高階。祐の胸に、恐れとは違う

う感情が浮かび上がる。

(マルオには、死んで嬉しい存在だったけど、高階にとつては大事な友達だったんだ……)

祐は顔を上げ、なるべく穏やかな声色で告げた。
「僕は、山岸君に何もしてない。殺す理由もないし、それ以前にで
きるわけがないよ……」

高階の片腕に翻弄されるくらい、華奢な身体。大柄な山岸を、橋
の欄干に持ち上げられるわけがない。

祐の言いたいことを理解したのか、高階は「クソツ」と舌打ちし、
そのまま立ち去った。

一人になつた祐は、汚れた文庫本の前にずるずると座り込んだ。

翌日、高階は学校に来なかつた。

交通事故にあり、意識不明の重体……そして次の日には、命の火
を消した。

祐の机には、昨日と同じシリーズのホラーが収まつていた。

『昨日高階君、キミに酷いことをしただらつへ、だから罰が当たつ
たんだよ』

花瓶が一つ置かれた教室。皆は声をひそめ、噂話を繰り返すばかり。

一人目は、偶然。でも一人続くとなれば、必然……。

祐は湧き上がる怯えをひた隠し、学校へ通い続けた。両親は共働きで、学校を休めば一人きりになつてしまふ。その方が不安だつた。（また、今日もある……）

毎朝、変わらず机に入れられる文庫本。

メッセージに宿る狂氣に、祐は追い詰められていく。

『だいぶ静かになつたね。もうぼくたち教室で話しても平氣かな？でも、邪魔者があなたいるか』

祐は、隣に座る須藤の横顔を眺めた。仲間が一人死んだというのに、飄々とした涼しげな眼差しをしている。

そんな姿に、死んだ一人も憧れていたのだ。そして須藤も、樂しげに二人の世話を焼いていた……。

祐の胸に、一つの決意が宿つた。

（もううんざりだ。ハツキリさせてやる………）

放課後、担任から須藤の連絡先を聞き出した祐は、駅前のファミレスに須藤を呼び出した。「僕も未だに信じられないんだけど」と前置きし、須藤に全てを打ち明けた。

無表情で聞いていた須藤は、氷の溶けたアイスコーヒーを一気に飲み干すと、地を這うような低い声で呟いた。

「ヤツの家、どこだよ」

「もしかして、乗り込むつもり？」

「ああ。住所教える」

「ちょっと待つて。僕も住所なんて知らないし、その前に、危険だよ

波がかつた茶髪の前髪をグイッとさしあげ、須藤が祐を睨みつけ

た。鋭い眼光は、高階の比ではない。ドクドクと脈打つ心臓を抑え、祐は伝えた。

「まだ証拠があるわけじやないし、何より一人が死んだのは、單なる偶然つて可能性もある……むしろ、そっちの方が確率高いし。もつと慎重に動こうよ。まずは証拠を見つけないと」

有能なブレーンである祐の説得は成功した。須藤はふつと視線を緩めると、店員に手を振りコーヒーのお代わりを頼む。その一の腕の太さや、耳元で揺れる複数のピアスが、今の祐にはやけに心強く思える。

（もし山岸と高階が、何か“物理的な”方法で殺されたなら、それは油断があつたからだ。須藤なら、油断さえしなければ大丈夫……）

祐は窓の外を見やり、溜息をついた。

車のヘッドライトが、残像を残し次々と通り過ぎて行く。店内にもたくさんのお客がいる。目の前には、誰よりも頼もしい味方がいる。それでも祐は、不安を消し去ることはできなかつた。

暗い闇の中に、血を流す瞳が浮かんでいるような気がして。

澄み渡る夜空には、無数の星が瞬く。その片隅に浮かぶ赤みを帶びた満月が、自転車を漕ぐ祐の影を、細く長く見せる。

祐が待ち合わせ場所のコンビニに到着すると、そこには既に一台のマウンテンバイクが止まっていた。しかし、店内の雑誌コーナーに人影は無い。携帯を取り出すと、須藤からメールが入つていた。

『早めについたから、この辺ぶらぶらしてる』

『全く、協調性が無いヤツ……』

祐は溜息をつき、『予定通り、今からマルオの家に向かうよ』と

返信した。

夜遅くに、突然クラスメイトの実家を訪問するのは、高校生としての道徳に反する。でも今回はそれが目的だ。

今日祐は、教室で須藤に一発殴られた。もちろん、マルオに見せるためだ。

マルオは常に“祐”を中心に動いている。山岸が死んだのは、本を買う資金を奪われたせいで、高階のケースは祐に乱暴したせい。その後マルオが大人しくしていたのは、須藤が祐に対しても何もしてこないから。

つまり『恨み』というエネルギーがなければ、マルオは何もできない。祐はそう睨んでいた。

(この行動は、危険な賭けだ。でも何かしなきゃ、僕の頭がおかしくなる)

逆恨みしたマルオが怪しい行動をしないか、マルオの自宅をチエックする。まずは祐一人で出向いて安心させ、何か起きたら近くに控えている須藤に合図する。そんな作戦だった。

プリントアウトした地図を片手に、祐は歩き出す。コンビニから先は、雑木林の間を抜ける細いあぜ道。

「なんか、一人肝試しつて感じだな……」

暗闇への恐れを無理やり笑い飛ばし、祐はザクザクと草を踏みしめて進む。幸い雑木林はこちんまりとしたもので、すぐに木立はまばらになり、視界に赤い屋根が迫ってきた。

「うわあ……」

その家は、祐のイメージを遥かに越える豪華な邸宅だった。

例えるなら、ゲームに出てくる森の奥の魔女の館。メルヘンチックなデザインの門に、玄関に繋がる緩やかな煉瓦のポーチ。庭先には、巨大な常緑樹。真横に伸びた太い枝には、二本のロープと板をくくりつけた、手作りのブランコ。

薄い雲がかかり、月明かりが弱まる。その一瞬、祐は幻を見た。

ブランコを漕ぐマルオと、背を押す父親、微笑む母親。笑顔が溢れる、楽園のような庭。

再び月明かりが庭を照らし、幻は消えた。楽園は一気に色を失う。割れたまま放置されたレンガ、雑草に覆われた庭、苔むし緑色に

変色した白壁。ロープが片方ちぎれ、板がひつかかるだけのブランコの残骸……。

祐はその光景に背を向け、玄関へ向かつた。なけなしの勇気を出してチャイムを鳴らす。

出迎えてくれたのは、にこやかに微笑む車椅子の男だった。

「そう、良広のお友達……今アイツは風呂に入つたばかりなんですよ。まあ、上がつてください」

男は手慣れた様子で車椅子を操り、祐を居間に招き入れた。小太りなマルオとは似付かない、精悍な顔立ちに引きしまった体躯の男だった。

祐は以前テレビで見た、パラリンピックの選手を思い出す。自分の身体を腕だけで操るためには、相当な体力が必要なのだろう。その努力を越えれば、車椅子はこうして見事な足代わりになってくれる。

通されたのは、オレンジの間接照明が灯る、モダンなリビングルーム。天井は二階分吹き抜けになつていて、剥き出しになつた太い梁が数本、空間を横切つている。梁につけられた大きなシーリングファンが、カラカラと音を立て回る。

ダイニングテーブルに腰かけた祐は、落ち着かない気分で室内を見渡した。男はテーブルに置かれたままの、いつ使われたか分からぬティーセットを膝の上に乗せ、カウンター キッチンの奥へ運ぶ。ガチャガチャと音を立てて洗い、新たにお茶を注ぎながら、独り言のように身の上話を語る。

「以前は、建築士として腕を振るつていたんですよ。この家も自分で建てたんです。試しに導入した最新のバリアフリー設備が、まさかこんな形で役立つなんて……皮肉なものですね」

男が笑う。片方の脣の端だけを浮かせる、不自然な表情で。

「あの、すごく立派な家だと、思います」

祐はなんとか愛想笑いを返した。須藤の武勇伝とは比較にならな

い、いたたまれない話だ。

その後男は、止まらない昔話を続けた。出された紅茶の湯気が薄れていく。祐は時計を気にしたもの、さほど時間が経っていないことも分かっていた。

短い時間をこれだけ苦痛に感じるのは、男の話のせいだけではない。この室内に漂う『悪臭』のせいだ。

モダンな家にそぐわない、吐き気をもよおすような生ゴミの臭い。よく見れば男の肌は脂ぎり、髪も髪も伸び放題だ。この不潔さも、空気を読めない会話も、祐の思い描くマルオの父親像にピタリと当てはまる。

「そこで提案したんだ。『せっかく立派な木があるんだから、ここにプランツを作ればいいじゃないか』ってね。うちの妻も良広も大賛成で……」

さすがに辟易し、祐は目の前の男から視線を外した。窓の外の暗闇には、赤い瞳がチラつく。

（二人の死は、きっと偶然なんだ。だってマルオは僕と同じで非力だし、放課後はこの父親の世話で手一杯なんだから……たまたま重なった事故に、あの本の内容を重ねて自己陶酔してるんだ）

心に浮かぶ疑惑と、それを否定する理性。葛藤する祐を前に、男の舌は滑らかだった。

男の中で、記憶のアルバムが少しづつ捲っていく。と同時に、穏やかな顔つきが徐々に変わっていく。苛酷な仕事に行き詰った末の悲劇。身体が不自由になった彼に対し、態度を豹変させた妻への恨み事。祐はもう愛想笑いすらできず、その話を聞き流した。

『ボーン、ボーン、ボーン……』

柱時計が、夜九時を告げる鐘を鳴らす。と、男は不意に笑顔を取り戻し、祐に問いかけた。

「そうだ。わたしも良広も、昔から本が好きでね。かなりの蔵書があるんだ。ちょっと見てみるかい？」

「あの、マルオ……良広君は、まだ？」

「ああ、今日ははずいぶん時間がかかるな。呼んで来よう。あそこが書庫だから、好きに見ていてくれ」

男が黒ずんだ指先を伸ばし、リビングの奥の引き戸を示す。

誘いをかけるようで、その言葉は強制だった。祐が重い腰を上げるのを見届けると、男はギシギシと車椅子を動かしリビングを去った。その音が遠ざかるのを確認し、祐はパークーのポケットから携帯を取り出す。

須藤に電話しようかと思い、まだ早いと止めた。『何かあつたら連絡する』という手筈だ。あの須藤のことだから、連絡がきたとならば、血氣盛んに乗り込んでくるだろう。

（まずは、証拠を見つけてからだ。マルオがあの一人の死と、何らかの関係があるような……）

思考を巡らせた祐は、妙にあの『書庫』が気になつた。何か証拠を漁るなら、フリーで動ける今がチャンスだ。

なげなしの勇気を振り絞り、祐はゴミが散らばり虫の這いする床を、恐る恐る踏み進む。

引き戸になつていい厚いドアを開くと、中は四畳半ほどの広さの部屋だつた。窓が無いため、漆黒の闇が広がつている。リビングの淡い照明では、暗過ぎて何も見えない。ただ、全ての壁面がみつちらと本で埋まつていることだけは分かつた。

部屋の明かりを求めて壁際を見やれば、ちょうどスイッチの上に枯れ葉のような黒い虫。伸ばしかけた手を瞬時に引っ込める。怖気を堪え、暗闇に携帯のディスプレーをかざしながら進んだ。

携帯の頼りない明かりが、最低限の情報を伝える。すぐ右手の本棚に並ぶのは、建築関係の本と時代小説に、哲学書。そのまま左へずれて正面の本棚は、母親のものだろう。ガーデニングや料理など、女性らしい実用書……と、祐の目が一冊の本を捉えた。何の変哲もない、バブルームのインテリア本だ。

途端に、心臓が激しく騒ぎ出す。手のひらに汗が滲む。

（あのマルオが……こんなに長く、風呂に入るか？）

何かがおかしい。咄嗟に踵を返した祐は、携帯を滑り落とした。

「ゴトン！」

「つと。ヤバイ」

屈みこんだ祐は、床を凝視したまま固まつた。
カーペットの上に、何か奇妙なモノがある。再び携帯を手にし、
ディスプレイ画面を床に向ける。

くすんだ灰色のカーペット。その上に赤黒いペンキで、不可解な
模様が描かれている。中央には大きな円、その内側には梵字のよう
な奇妙な形のマークが散りばめられている。

あの本に描かれていた、忌わしい魔術の紋様

円陣の中心に横たえられた人形が、ターゲットの魂を吸い込んで
……。

「そ、そうだ、須藤に連絡を……」

祐は携帯を手に立ち上がつた。ガクガクと震えながらも通話ボタ
ンを押した、その刹那。

虫が飛ぶ音がする。いやに規則的な『ブーン』という音が、小刻
みに聽こえる。

激しく高ぶる胸を抑え、祐は振り向いた。視界の先、部屋の左奥
隅に小さな青い光。蛍の灯のような儚い点滅。

足が勝手に、その場所へ向かつ。かざした携帯のライトが、眞実
を映し出す。

「 ッ！」

床に転がり、チカチカと光る『着信アリ』の印。

その脇にあつたのは……。

「あ、あああああああああ……」

本棚を背にし、マネキンのよつにもたれかかる須藤。くたりと胸
へ落ちた頭部はぐっしょりと濡れ、Tシャツは鮮やかな赤に染まつ
ている。

後退ろうとするも、強張った身体が言つことを聞かない。

まだ車椅子が戻ってくる気配はない。今のうちに、早く、早く

「おや、どうしたんだい？ 西野君」

その瞬間、部屋の明かりがつき……振り向いた祐の鼓動は、止まりかけた。

男は、血らの“両足で”立っていた。右手には、血糊のこびりついた斧をぶらさげて。

「な、なんで……その足……」

薄汚れたカーペットの上、虫の死骸を踏みながら、祐は紋様の上を後退していく。室内の空気は濁み、血ずと全身の毛穴から汗が噴き出す。

「良広が治してくれたんだよ……あの子は、この世界の神なんだ。だからあの子を虐げる者には、天罰が下る……」

男が恍惚とした眼差しで微笑む。目眩に襲われた祐は、堪え切れずその場にへたり込んだ。

男の血走った目が見開かれ、祐を初めて見る相手のように見つめる。不思議そうに小首を傾げ、手にした斧を高く掲げる。

「やめる、来るな……」

祐の理性は消えて無くなる。僅かに残った本能が、祐に「逃げる」と叫ぶものの、身体が言うことをきかない。禍々しい部屋の中央に座り込んだまま、歯の根をガチガチと打ち鳴らし、掠れ声を漏らすことしかできない。

男が一步一歩、歩み寄る。

振り上げた斧が、祐の目の前に迫ったそのとき

「止めて！」

祐の目からは、いつしか涙が流れていた。ぼやける視界の中、見慣れたあの顔が迫つてくる。

飛び込んで来たのは、マルオだつた。本当に入浴していたのだろうか、べつとりと額に張り付いた前髪から、ポタポタと水滴が落ちている。

「西野君は殺さないで！」

祐の前で立て膝をつき、両腕を真横に伸ばす。肩越しに見える男

の顔には、明らかな戸惑いが浮かんでいた。

「良広……」

「乙君は……西野君は、ぼくの大事なひとなんだ。何度もそう言ったよね？」

男はバツが悪そうに下唇を噛み、頑垂れた。その眼に、先程までの殺意は感じられない。それでも祐は、そこから一歩も動けなかつた。完全に腰が抜けてしまったようだ。

床についた手の甲を、黒い虫が這いずる。背後からは「うつ……」と鈍い呻き声が聴こえる。須藤はまだ死んでいない。命だけは助かるのだという微かな期待が安堵の涙に変わり、祐の頬を止め処なく濡らす。

マルオはそんな祐を穏やかな眼差しで見つめ、ポンと肩を叩いてきた。そのままのそりと立ち上がり、後ろ歩きに遠ざかっていく。男と良く似た、唇の端を持ち上げる微笑で。片手には、なぜか小さな人形を握っている。マルオが一步後ずさるたびに、床にはナメクジが這つたような水跡が残る。

（何だ……何かが、おかしい……）

祐は眉を顰めた。素早く瞬きし、涙を追い出してマルオの姿に目を凝らす。

良く見れば、マルオは全身びしょ濡れだった。奇妙な白装束姿に、青褪めた頬。濡れた前髪の奥には、どこか嬉しそうに細められた二つの瞳。

刹那、祐の心に蘇る一つの挿絵。山岸が死んだ日、薄暗いパソコンルームでパラパラと捲つた、おぞましいホラーに出てくる『儀式』のシーン。

（そうだ……確かあの小説の主人公は、新たな操り人形を生み出す前に、こんな格好をしていた……）

錯乱しかける頭を何とか動かし、祐は記憶の糸を手繕つた。

主人公が『儀式』を行うために必要なアイテムは、操りたい相手の髪や持ち物。そして器にする人形。術者は水に打たれ禊ぎを行つ

た後、円陣の中に入形を置く。

ストーリーと今の状況を比べて、決定的に違うのは人形の位置だ。本来円陣に置かれるべきは、マルオが手にした“人形”の方。しかし、今ここに居るのは祐で、人形はマルオと一緒に……。

「マル、オ……？」

祐の声は完全に掠れ、喉の奥に絡まった。マルオは右手に握った人形をチラリと気にし「上手くいくかなあ」と囁いた。

そして、マルオの裸足の足が、紋様の円陣からはみ出した瞬間。ブツン。

一瞬、祐の視界はスイッチを切ったように、漆黒の闇に覆われた。同時に襲いかかる、猛烈な寒気。まるで液体窒素を浴びせかけられた植物のよう。身体は強張つて硬直し、身じろぎ一つできない。ただ「暗い、寒い」という鮮烈な感覚だけが祐を支配している。祐は思わずあえぎ声を漏らし……

(ッ ?)

声が出ない。それどころか、唇を動かした感覚すらない。

戸惑う祐の頭上から、奇妙な声が響いた。耳鳴りのように歪で、圧倒的な存在感を示す 神の声。

「良かつた、成功したみたいだね」

次の瞬間、祐はようやく暗闇から解放された。しかし眼下に広がった世界は、にわかに信じがたいものだつた。

(まさか……そん、な……嘘だ ッ !)

絶叫 したはずが、何も聞こえない。そんな祐の頭をそつと撫でる『指』。「ちょっと待つてね」の言葉とともに、視界がぐわりと揺れ動いた。ぶれた写真を思わせる残像を描きながら、遠くへ。祐は心のどこかで、自分が“放り投げられた”的と悟った。そう、誰かの手で軽々と、まるで人形のように……。

床に落ちた痛みは感じなかつた。動くことの無い四肢を横たえ、天井の明かりを見つめる祐に、スッと影が差した。

そこには、嬉しそうに微笑む、巨大な『自分の顔』があつた。

「いいよ。『そっち』は殺しちゃつて」

頭の中に直接響く、邪悪な神の声。再び抗えない力で持ち上げられ、身体の向きを変えられる。

見せつけられたのは、虚ろな目をして佇むマルオ。その奥に立つマルオの父親が、命じられるままに動く。斧をやらりと高く掲げ、愛する我が子へと一気に振り落とす。

一瞬、何もかもが赤に染まつた。

深々と斧がめり込んだマルオの身体は、力無く床に崩れ落ちた。頭蓋骨は砕け、赤黒い血液が激しい勢いで四方へ飛び散る。床にも天井にも、マルオの着ていた白装束にも、手斧をだらりとぶら下げた男の全身にも。

残酷な光景をまざまざと見せつけられたといふのに、祐の身体が怖気に震えることはない。心は恐怖に張り裂けそうなのに、目を閉じることも、顔を背けることもできない。

そんな祐の前に、再び巨大な『祐の顔』が迫る。潤んだ瞳に歡喜の光を浮かべ、祐を正面から覗きこんでくる。

形良い唇が薄らと開かれ、もたらされた最期の台詞は……。

キミの全部を、よつやく手に入れた。心も、身体も。

その後、小さな町は騒然となつた。

気が狂い、妖しい魔術に傾倒した男が起こした惨劇。妻を殺して庭に埋めた後、溺愛する息子をいじめていたと曰される人間を次々と殺害、最後はその息子まで手にかけた。

彼自身も、ありえない事故の犠牲になつた。自宅で最後の殺戮を行つた直後、リビングに取り付けられていた巨大なファンが落ち、即死だつたという。

生き残った祐と、九死に一生を得た須藤の一人は、真新しい墓石の前に佇んでいた。須藤が『丸尾家』と記された墓標に花を添え、手を合わせる。

須藤は頭に包帯を巻いているものの、自力で歩けるくらいには回復した。髪を丸刈りにしたせいか、不良には見えない、牙を抜かれた獣のような顔つきをしている。「借りてた金、返すよ」と千円札を数枚、ライターの火で燃やす。

「おい、お前もやれよ」

須藤の横顔に見とれていた“祐”は、慌てて墓石の前に立つた。一応須藤に倣い手を合わせたものの、悲しみも痛みも、何も感じなかつた。ただ、ゆらゆらと立ち上る線香の煙が、どこか悲しげに蠢いているように見える。

そのままぼんやりと墓石を眺め続ける祐に、須藤が「行こうぜ」と声をかける。

祐は頷くと、真夏の太陽に向かつて大きく伸びをした。持ち上がつた黒いベストの奥、Tシャツの胸ポケットから小さな人形が一瞬顔を覗かせる。祐はその人形の頭を、指先でそっと撫でた。まるで聞きわけのない子どもをあやすように。

そしてもう一度墓石を見つめると、唇の端を軽く持ち上げ、囁いた。

「さよなら、マルオ君」

解説＆作者の言い訳（痛いかも？）です。読みたくない方は、素早くスクロールを。

この作品は某サイトの「」企画用に書いたものでした。お題は『ライトノベル』と『愛』……うん、これしかねえなど。日頃からDVやらストーカーやらの偏愛モノを書いたりしてるので、この作品が一番キモくなつたと思います。特に男子読者様は「プラトニッククラブ発言」でゾゾゾとなつていただけたのではないかと……。一応続編二つ分で三部作にする構想はあるのですが、いつとつかれるか分からぬので、これはこれとして楽しんでくださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0059z/>

さよなら、マルオ君。

2011年11月30日15時52分発行